

漢詩文引用
より見た
源氏物語の研究

古沢未知

古沢未知男著

漢詩文引用
より見た
源氏物語の研究

桜
楓
社

漢詩文引用より見た 源氏物語の研究

昭和三十九年六月二十五日 初版発行
昭和四十三年三月二十日 再版発行

定価二八〇〇円

著 者 古沢未知男
発行者 南雲克雄
印刷所 又新 社

東京都千代田区神田猿樂町二の五
株式会社 桜 楓 社
電 話 (291) 五六六〇―二

序

私はこれまで国文学と漢文学との比較研究に興味を持ち、特に其の手初めとして万葉集と源氏物語とを取り上げて来た。やり出せばなか／＼面白く殊に此の方面の研究が従来まだ餘り開拓されて居ない現状などからして、盲蛇ではあるが聊か其の意義と価値とを認識し得るようになつた。

本書は先づ一応此の成果を纏めたものであり、前著「漢詩文引用より見た万葉集の研究」とは即ち其の姉妹篇をなすものでもある。但だ私は何分にも生来の魯鈍に加ふるに遠く都を離れた地方の、而も研究設備の乏しい所に在り、突然井底の蛙にも等しい知識を以て唯無闇に書き綴つただけに、其の所説内容に於ては定めし独断や誤謬も多かるべく、これを世に出すについては内心慚からぬ危惧と躊躇とを覚えたものである。

しかし私も一介の研究者として職を大学に奉じ、かた／＼文部省科学研究費の交付助成を受けたりもして居る以上私は私なりに、そして私の力の及ぶ限り何等かの業績を示す事はやはり私に課せられた重要な責務である事も承知して居る。勇を鼓して出版を決し、本日茲に漸く其の一端が適へられただけである。思へば牛歩にも似た誠に遅々たる足どりであつた。我乍らもどかしく且つ恥かしく思ふ事頻りであるが、同時にまた一株の感慨をも禁じ得ない。

嘗て私が大学を出て或同郷同窓の先輩を訪ねた時、其の先輩が私に次のやうな事を言はれたのを覚えて居る。それは大凡「君がこれから十五年研究を続けたら何か出来るかも知れない。」といふやうな意味の事であつた。が其の所

私はまだ其の時其の言葉の意味が本当には理解出来なかつた。のみならず私は直ちに軍関係の職に就き、次いで終戦を迎へ、暫し虚脱空白の時を過した。それが昭和二十四年新制大学の発足と共に現職に移つてから初めて何とか研究への再出発が出来た。それから数へて今日丁度十五年になる。成果の内容は別として彼の先輩の言が期せずして符節を合した訳である。先輩の言聴くべしとは自身を以て必みく感じて居る。

所で本書の成るについて既往多くの先学から受けた学恩は実に測り知れないものがある。今は既に故人となられた池田亀鑑博士・金子彦二郎博士・水野平次氏等は先づ私が源氏と漢文学との比較研究を進める上によき先達の役を供して下さつたもの。私が此の研究に志した当時、三氏には親しく其の警咳に接し種々御話を承つた事もあつたのであるが、何れも皆鬼籍に入つて居られる事を思へば、其の時はまだあんなに御元氣な御姿であつたのにと転た追懷の情に堪へない。

それに生存の方では玉上琢弥博士・川口久雄博士・今井源衛氏等があられる。中でも今井氏の如き、同じ九州といふ比較的近い所に在つて学会其他屢々御目に掛り多くの示唆を戴いた。而も時に孟浪の言を弄し、或は礼を失した所なきやを恐れるものではあるが、衷心深く感謝の誠を捧げる所以である。

更にいま一つ此の拙い研究に終始好意を以て鞭撻し激励して下さつた倉野憲司博士のあられた事も忘れる事は出来ない。博士は曾て私の此の研究途上の数年間私の大学に出講して来られた。それが博士に接する最初の御縁であつたが、爾来引続き今日まで常に親炙し教示を仰いで居る。勿論源氏は一応博士の御専門外ではあるが、其間至らぬ私に垂れて下さつた助言は直接間接また非常に貴重な価値高いものであつた。

其外尚私が上京の都度御訪ねして種々相談しました親しく教示の労を惜しまれなかつた竹田復博士・久松潜一博士
山岸徳平博士・吉田精一博士の方々にも何彼と一方ならぬ御芳情に与つた。

最後に此の書の出版に当り直接御世話になつたのが畏友中西進博士である。博士もまたさる年私の大学で万葉学会
が開かれた折初めて御目に掛るまで実は全く一面識もなかつた。それが学会の御縁によつて直ちに此の書の出版を幹
旋して下さつた。幸桜楓社の及川篤二氏も快く私の希望を容れられ、其の御尽力によつて本書出版の私の念願は達せ
られる事となつた訳である。

かくて私此の度の著書出版には以上実に多数の方々の御好意と御援助とに依る所絶大である。けれども本書の内容
はさういふ御好意と御援助とにも拘らず極めて貧弱粗末なものとなつて了つた。それは私の浅学と非才、微力と怠慢
との然らしめる所で今更如何とも致し方はない。私とて勿論また学問研究の厳しさや冷たさは知つて居る。本書に
述べる所甘んじて其の冷厳な批判を受けなければならない事言ふまでもない。がこれによつて研究者としての私の責
務を幾分でも果す事が出来、併せて私の此の研究の方向に何等かの指針と希望とでも与へて下さる事が出来るなら、
それは私にとつて又とない幸と言はなければならない。

昭和三十九年五月一日

著 者

漢詩文引用
より見た

源氏物語の研究

目次

第一章 詞句出典……………一

第一節 詞句引用の大勢……………一

第二節 典故決定の問題……………三

第二節 典故・掇・義……………三

第二章 樣式技法……………五

第一節 桐壺卷と長恨歌（同工式引用）……………八

一、類似模倣—構想・輪廓……………九 二、相違と独創……………三

第二節 帚木卷と議婚（同婦式引用）……………一〇

一、類似—構想・輪廓……………一〇 二、相違と独創……………一〇

第三節 須磨・明石卷外（断章式引用）……………一〇

一、概観及び特色……………一三 二、引用企図—独創……………一三

三、其他諸卷……………一三

第三章 性格構成……………一七

第一節	文集引用より見た源語の性格	一七
一、文集の分類と楽天の立場	一七	一七
第二節	文集引用より見た源語と朗詠	一六
一、詞句引用の傾向	一六	一七
二、対句引用の傾向	一七	一七
第三節	文集引用より見た源語と枕	三八
第四節	源語構成の諸問題	三九
一、源語第一部の構成―紫上系と玉鬘系	三九	三八
二、引用曲折の問題	三八	三八
結	語	四四

第一章 詞句出典

第一節 詞句引用の大勢

源氏物語に引用された漢詩文の詞句出典については、既に湖月抄以来先学諸家によつて多く指摘されて居る。そしてこれも亦万葉等の場合と同じく、中には典拠として果して妥当か否か疑はしいもの、或は詞句は同じでも尚別の典籍に拠つたのではないかと思はれるものがある。更に套語の問題等もある。其外疑問を存するもの、典拠不明のもの等があり、将来更に訂正或は追加さるべきものも尠くはないであらう。が此の場合でも亦其の大勢に於ては、寧ろ万葉以上にはつきりした方向を見出す事ができる。即ち文集の優位である。先づ此の点について眺めて見たい。

初めに源語引用漢詩文の典拠詞句を示すと後記別表の如くである。

即ちこれを集計すれば（括弧内は頻度数）

白氏文集⁸⁰⁽⁹⁷⁾、史記¹³⁽¹⁴⁾、和漢朗詠集¹³⁽¹³⁾、文運⁷⁽⁸⁾、日本書紀⁵⁽⁶⁾、道真⁴⁽⁴⁾、遊仙窟・毛詩各³⁽³⁾、漢書・晋書・列子・論語各²⁽²⁾、述異記¹⁽³⁾、紀在昌・孝經・儀礼・韓非子・戦国策・陶淵明（桃花源記）、劉夢得・永熙各¹⁽¹⁾となり、更に比率及び重複数を併せ表示すれば左の如くである。

比率 %	重 複 数				句 (頻度) 数	要 項 書 名
	計	其 他	朗 詠	文 集		
55.1 (58.0)	23 (31)	5 (5)	17 (25)	1 (1)	80 (97)	文白 集氏
8.9 (8.3)	5 (5)	3 (3)	2 (2)	0 (0)	13 (14)	史 記
8.9 (7.7)	3 (3)	2 (2)	0 (0)	1 (1)	13 (13)	朗和 詠集漢
4.8 (4.7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	7 (8)	文 選
22.0 (20.9)	11 (11)	9 (9)	2 (2)	0 (0)	32 (35)	其 他
	42 (50)	19 (19)	21 (29)	2 (2)	145 (167)	計

ついで見るに

1、句数及び頻度数共、白氏文集が五五・一%乃至五八・〇%と過半に達する圧倒的多数を占めて居る。之に次いで史記・和漢朗詠集・文選等がある。が何れも文集には遙かに及ばない。文集及び他の諸典籍の間、仮に若干の出入変動があつたとしても、そのため文集の優位が動揺する事は絶対に考へられない。否事実には次節後記の如く、套語或は若菜下琴を語つた一聯の記事に於ける史記・文選其他、寧ろ却て文集以外の書に其の可能性は強いと云つて良い。ただし彼の紫式部日記に

宮の御前にて文集の所々読ませ給ひしなど、さる様の事知しめさまほしげに思ひたりしかば、いとしのびて人も侍らはぬもののひまひまに、おとどしの夏頃より、楽府といふふみ二巻をぞしどけなくかう教へたて聞へさせ侍る云々。

といふ記事がある。中宮が態々文集樂府の講議を所望されたといふ如き、既に文集が当時広く愛読された事を物語つて居る。が特に式部はそれにもまして文集を読み、従つて又それに対する深い知識を有して居た事が想像される。それが直ちに源語の此の事象となつて現はれたのであらう。

2、句数・頻度数間の差違が其他で3、史記及び文選が僅かに各1を数へるだけで、朗詠は兩者同数である。これが文集では80対97と17も多くなつて居る。従つて比率も文集のみが頻度数の方が大きく、他は総て頻度数の方が逆に小さくなつて居る。これつまり文集詞句が特に意識的に屢々活用された事を意味する。

3、文集と朗詠との重複が、文集で17²⁹、朗詠で1(1)、合はせて18²⁹の多きを数へる。重複総数の四割乃至五割近くは文集・朗詠の重複といふ事になる。これ又源語や朗詠に於ける文集引用の優位性を示すものである。源語と朗詠乃至文集との関係については後に述べる。

4、なほここで一寸注意されるのは、「文は文集・文選」と文集と並び称せられた文選が案外少く、却て史記が著しく之を上回つて居る事である。

而も史記は單に右の数字の上からだけでなく、内容的にも可成り大きな比重を有するが如くである。例へば後述桐壺巻以下に於ける桐壺更衣と弘徽殿女御との関係は、恰も史記留候世家や呂后本紀に見られる呂后・戚夫人のそれを思はせる。又賢木巻に於ける呂后本紀・鄒陽伝・周公世家一聯の引用の如きも、確かに史記を基として記された跡を見る。

或は乙女巻源氏が嫡子夕霧の成長に当り、其の将来を思ひ熱心に學問修業の必要を説く所がある。而もそれは學問より早く然るべき地位につけて宮中の交らひをさせたが良いといふ親戚や周囲の反對を敢て抑へて行はれる。そして其の結果は「大かたの人柄まめやかに、あだめきたる所なき」——此の語は源語作者の抱く人物論中恐らく最も大きな主張の一つであらう。それは後述有名な帚木巻雨夜品定に於て各種の人物を評論した後、結局遂の頼み所は「なほじちになむよりける。」と斷じた態度にもよく表はされて居る。其他彼女が浮華放縱を誡めたのは尚

篇中至る所に見られる。——夕霧はよく父の此の庭訓を体して学の道にいそしむ事となる。そこで「いかでさるべき書ども疾く読み果てて交らひもし世にも出で立たむ」と決心した夕霧は、「唯四五月の中に」「史記などいふ書は読み果て給ひてけり。」と、悉く読破するといふ精勵の有様であつた。やがて寮試受験に先立つて態々源氏の面前「史記の難き卷々」を読ませた所、「至らぬ限なくかたがたに通はし読」んだのを見て、関係者一同涙を流して喜んだ。かくて入学の日も試験官多数の面前少しも臆する事なく読み了せ、ついで文人・擬生等の考試にも難なく合格し、師弟また心を入れて愈々勵みを加へたといふのである。云はば源語作者の学問論・修業論の表明された所である。而も若き貴公子夕霧の学問修業・大学受験の教科書として、——勿論実際の科擧の課目としても、——所謂三史五經を始め当時数多くあつた漢籍中、特に此の史記が代表的に取り上げられ、重要な役割を負うて居るといふ事は、やはり大いに注目されなければならない。「註1」果してこれを裏書する如く彼の紫式部日記には、兄惟孝が史記を読むのを傍から聞いて当の兄よりも早く暗んじ、由来学問教育に熱心であつた父をして、此子が男子であつたらと歎息せしめたといふ有名な記事がある。彼此照合して何か繋がりがあるやうに思はれる。其外同日記には後一条帝御誕生に際し藤原広業が五帝本紀を、又夜の御湯殿の儀には大江孝周が文帝の巻を読んだ事も見えて居る。「註2」更に同日記には史記関係の記事が文集関係の記事と並んで多い。——文集4、史記3、其他2「註3」——恰も源語の場合と表裏全く一致する訳である。此等の事象は相俟つて何れも源語と史記との密接な関係を証明するものである。

文選より史記の引用が多い事、これは彼の枕草子に於ても同様である。(後記) けだしこれ一つには奈良朝より平安朝に至る時代好向の然らしめる所でもあらう。そして源語の場合、特に其の物語・小説てふ性格上、自然文選より史記の如き叙事性のもの——後述文集の新楽府・秦中吟や長恨歌も亦此の意味に於て全く同様である。——が多く採られたためではなからうかと思ふ。そして更に源語の場合、恐らく作者は右に述べた日記や乙女巻の記事の如く、夙くより史記を読み習ひ且つ諳んじもして居たのが、直ちに乙女巻該条の構想の中に出現し、又

広く源語全般に亘つて裏面一種の原動力となり、それが右の結果となつて現はれたものではなからうか。

書目別・典拠詞句一覧

詞句	原典	源氏物語	卷名	備考
聴我歌両途	〔白氏文集〕 〔諷諭〕 秦中吟	我が二つの道歌ふを聞け	帝木	
朝露貪名利	不致仕	朝の露に異らぬ世を何を貪る	夕顔	
掛冠顧翠綬	〃	年深き身の冠を掛けむ何か惜しからむ	若菜下	(後漢書) (漢書)
懸車惜朱輪	〃	冠を掛け車を惜しまず捨てし身	〃〃	(白虎通)
金章腰不勝	〃	齢などこれより増る人腰たへぬまで	行幸	
偃僂入君門	〃	屈まり歩く例昔も今も待るめれど	〃	
幼者形不蔽	重賦	若き者は形かくれず	末摘花	
繞廊紫藤架	傷宅	廊を繞れる藤の色	胡蝶	
已被楊妃遙側目	新樂府 上陽白髮人	遙かに目を側められ	竹河	
耿耿殘燈背壁影	〃	火仄かに壁に背け	帝木	文集早夏 朗興 朗詠
蕭蕭暗雨打窓声	〃	窓を打つ声など珍しからぬ古言	幻	

外人不見見応笑	〃	〃	疎き人に見えば面伏せにや思はむ	帚木
胡地妻児虚棄捐	〃	縛戎人	胡の地の妻児をば空しく棄てすてつ	玉鬘
甘泉殿裏令写真	新樂府	李夫人	絵にかきて恋しき人見る人	蜻蛉
反魂香降夫人魂	〃	〃	人形をも作り絵にも書きとめて	宿木
人非木石皆有情	〃	〃	人の国にありけむ香の煙	総角
不見蓬萊不敢歸	〃	海漫漫	昔ありけむ香の煙	宿木
童男卯女舟中老	〃	〃	あはれなる御心ざまを岩木ならねば思ほし知る	東屋
吾君不遊有深意	〃	驪宮高	人木石に非ざれば皆情あり	蜻蛉
中人之産数百家	〃	〃	亀の上の山も尋ねじ船の中に老いせぬ名をばここに	胡蝶
未足充君一日費	〃	采詩官	世の中の煩ひならむ事更にせさせ給ふまじくなむ	若菜上
君眼不見門前事	〃	陵園妾	御門より外の物見をさをさし給はず	若菜下
命如葉薄將奈何	〃	〃	このあらむ命は葉の薄きが如し	手習
松門到曉月徘徊	〃	〃	松門に曉至りて月徘徊す	〃
柏城尽日風蕭瑟	〃	〃	ひねもすに吹く風の音もいと心細きに	〃
仮色迷人猶如是	〃	古塚狐	誠に人の心惑はさんとして出で来たる仮の物にやと疑ふ	〃

列子

梟鳴松桂枝

凶宅

松のひゞき木ぶかく聞えて気色ある鳥のから声に
鳴きたるも梟はこれにやと覚ゆ

夕顔

狐蔵蘭菊叢

〃

宮の中いとど狐のすみかになりて疎ましうけどほ
き木立に梟の声を朝夕に耳馴らして

蓬生

從此君王不早朝

長恨歌

〔感傷〕

朝政は怠らせ給ひぬべかんめり

桐壺

三千寵愛在一身

〃

人一人を思ひかしづき

真木柱

姊妹弟兄皆列土
可憐光彩生門戶

〃

ほとりまでも匂ふ例

〃

太液芙蓉未央柳

〃

太液の芙蓉未央の柳

桐壺

夕殿螢飛思悄然

〃

夕殿に螢飛んでと例の古言も

幻

孤燈挑尽未成眠

〃

燈火を挑げ尽して

桐壺

鴛鴦瓦冷霜華重

〃

霜の花白し

葵

イ旧枕故衾
夢翠衾寒誰与共

〃

旧き枕故き衾誰と共にか

〃

魂魄不曾來入夢

〃

大空を通ふ幻夢にだに見え来ぬ魂の行方尋ねよ

幻

臨邛道士鴻都客
能以精誠致魂魄
遂教方士殷勤覓

〃

尋ね行く幻もがな伝にても魂の在処をそこと知る
べく
魂の在処尋ねんには

桐壺
宿木朗詠
朗詠

如聽仙樂耳暫明	聞舟中夜彈琵琶者委身為賈人婦	門前零落鞍馬稀	隣船有歌者	京師長吏為之側目	顧左右前後粉色如土	此恨綿綿無絕期	在地願為連理枝	在天願作比翼鳥	七月七日長生殿	釵留一股合一扇 釵擘黃金合分鈿	細合金釵寄將去 唯將旧物表深情
ク	ク	琵琶行	夜聞歌者宿鄂州	ク	長恨歌伝	ク	ク	ク	ク	ク	ク
耳をぞ明らめ侍らむ	商人の中にてだにこそふること聞きはやす人は侍りけれ	御門のわたり所なく立ちこみたりし馬車うすらぎ	かくじうにありけむ昔の人	上達部上人などあいなく目を側めつゝ	こゝら佳き人を見集むれど…………お前なる人は誠に土などの心地ぞする	叶はざりける命の程ぞ尽きせず恨めしき	羽を並べ枝を交さむ	羽を交さむ	長生殿の古き例	昔の御釵の端を聊か折りて	亡き人の住処尋ね出でたりけむ証の釵ならましかば
横笛	明石	賢木	紅葉賀	桐壺	蜻蛉	ク	ク	ク	夕顔	絵合	桐壺